

延長保育における保育方法に関する研究 —保育者による子どもへのかかわりに着目して—

福山市立大学教育学部 渡邊真帆

問題背景と研究目的

就労形態が多様化する今日、時間にかかわりなく利用可能な保育施設が求められ（諏訪 2006）、保育時間の延長にかかわる施策が進められている。その一つに、保育所や認定こども園を対象とした延長保育が挙げられる。これは、「延長保育事業実施要綱」に基づき実施されるものであり、夕方から夜間、あるいは早朝等、通常の利用時間帯外に必要な保育を確保する事業である。本研究では 1 日の中での保護者との再会に向けた降園の時間帯に焦点化するため、夕方以降の時間帯に限定する。

延長保育は事業であるものの、そこで過ごす子どもや保育者にとっては 1 日の保育の延長線上に位置するため、それ故の工夫や配慮があると想定できる。そこで、延長保育を含む降園の時間帯に着目し、この時間帯のかかわりを検討することで、多様な降園の在り方に示唆が得られると期待される。

以上より、本研究は、延長保育における保育方法、とりわけ保育者が子どもとかかわる際の工夫や配慮を明らかにすることを目的とする。

研究課題 1

延長保育を含む降園の時間帯における保育がこれまでどのように捉えられてきたのか、先行研究を偏りなくレビューするためにシステマティック・レビューの方法、中でも PRISMA2020 声明日本語版（上岡ら 2021）を参照、論文を収集及び選定し、研究動向を整理した。

手続きの結果、降園の時間帯の保育に関する研究 51 件は 5 種類に分類された。①幼稚園での預かり保育（教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動）に関する研究 32 件、②延長保育に関する研究 6 件、③両方を扱う研究 4 件、④降園前の活動を扱う研究 6 件、⑤降園方法に関する研究が 3 件であった。預かり保育に関する研究が多い傾向であり、実施状況や保護者の利用状況等の調査が中心であった。

一方、保育所や認定こども園を対象とした延長保育（事業）の研究については比較的少数であった。近年のニーズの高まりや施策拡大を踏まえ、保育所や認定こども園で取り組まれる延長保育を研究対象に位置づけ、実践的な研究の必要性が確認された。

研究課題 2

保育所勤務の A さんに半構造化形式でインタビューを行い、「降園の時間帯、保育者は子どもとかかわる際にどのような工夫や配慮をしているのか」という問いについて実践的立場から知見を得た。A さんは保育の熟達者とされる 11 年以上の保育経験を有する。インタビュー・データの分析は、質的データ分析法の一つである SCAT（Steps for Coding and Theorization）を採用した（大谷 2019）。なお、福山市立大学研究倫理審査委員会による承認を得て調査を実施した。主な結果は次の 3 点である。

(1) 揺らがない最重要事項上の活動選択

A 保育者は時間的特性、子ども個人の特性、1 日の様子、周囲の状況、そして保育者の経験則に基づく直感など、複数の視点から安全を配慮して降園の時間帯の過ごし方や遊びを選択すると明らかになった。

(2) 時間帯固有の雰囲気によるかかわり

子どもにとっても、保育者にとっても、年齢による集団での保育とは異なる、緊張から緩和された雰囲気有する時間であると明らかになった。保育者は、子どもが見せる姿を把握・理解し、翌日以降の保育につなげるとのことであった。

(3) タイムリミットに伴うかかわりの葛藤

保育者は、保護者による迎えの見通しや病院の診療時間等、日中とは異なるタイムリミットを意識して子どもとかかわると明らかになった。また、午前や昼間には十分保障できる、子どもが気持ちを立て直すための時間的猶予が無い場合は、トラブルに発展する前に介入を選択することもある。尊重したい体験と楽しい気持ちで送り出したいという願いから葛藤し、かかわりの程度を調整すると分かった。

まとめと今後の課題

以上、保育者による子どもとかかわりの工夫や配慮について、延長保育という降園の時間帯の固有性が示唆された。今回の成果を踏まえ、降園という移行の時間帯における保育者によるかかわりの具体や保育者間の連携について研究の展開が求められる。

【謝辞】

インタビューに協力いただいた研究協力者の方に心より感謝申し上げます。